

山科の魅力探訪

～ あなたも山科の魅力の語り部になりませんか ～

大名岩（大塚・小山石切場跡）

コース

資 料

- 日 時 平成27年10月12日（月・祝）13:00～16:00頃
- 案 内 車石・車道研究会
- コース 裏面コース図参照
- 主 催 ふれあい“やましな”実行委員会

(3) 大名岩(大塚・小山石切場跡)コース

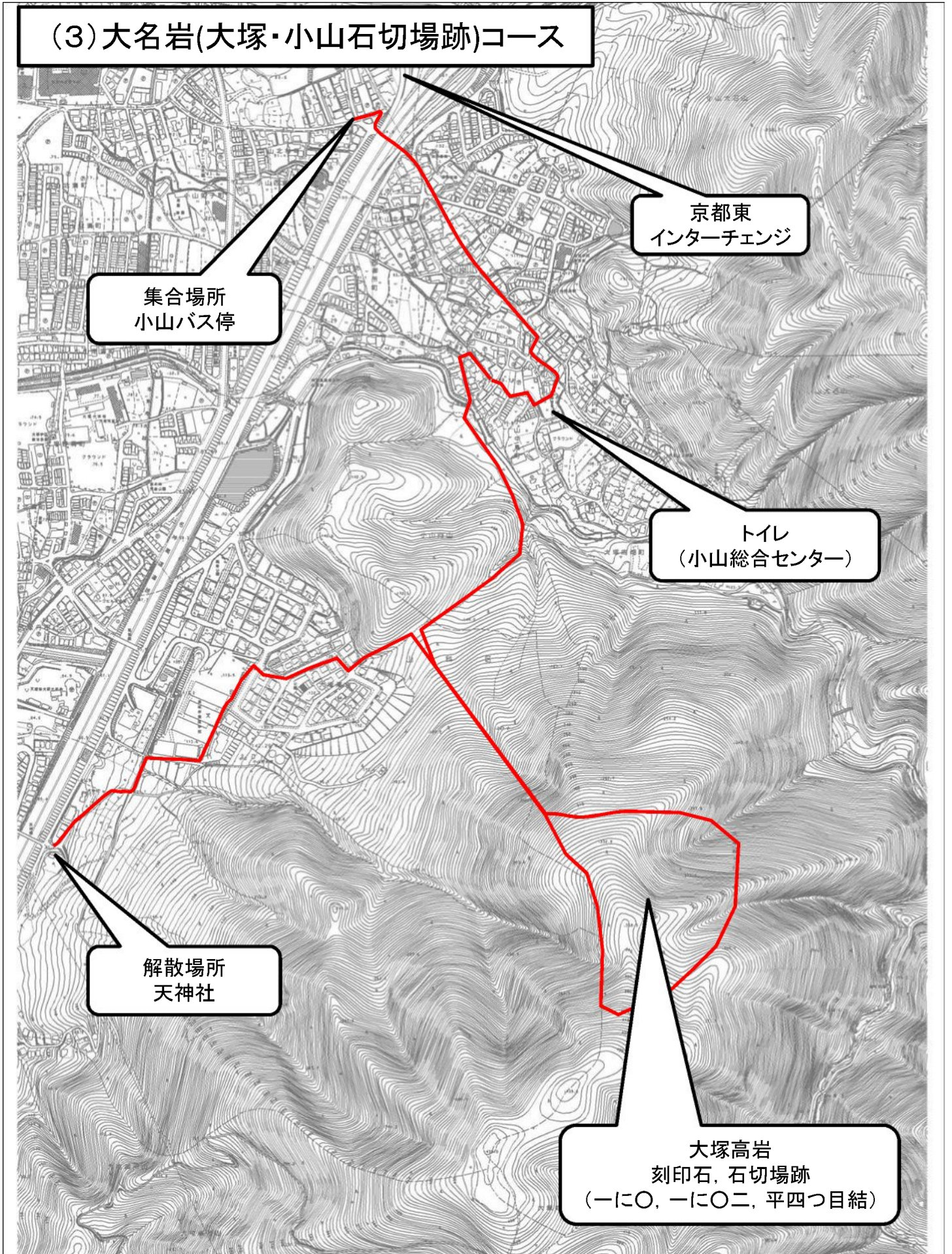
集合場所
小山バス停

京都東
インターチェンジ

トイレ
(小山総合センター)

解散場所
天神社

大塚高岩
刻印石, 石切場跡
(一に〇, 一に〇二, 平四つ目結)



伏見城関連 山科（大塚・小山）の石切場

中川亀造・武内良一・久保 孝

はじめに

1977年の春、「山科の歴史を知る会」の例会で、大塚の薪取り山の持主でもあった山田二郎氏から大石（牛巖）に刻印のある事が報告され、会の山本正明氏の尽力で伏見城研究会、築城史研究会合わせて六人のメンバーが、「行者ガ森」山一帯を二日にかけて調査し、結果は、新たにおせき溪不動近くに「角立ち四つ目結」（図1）が発見され2石となった（『京都新聞』1979年2月6日）。この大塚山で切り出された石材は、伏見城石垣石として運び出されたようだ（図2）。



図1 「四つ目結」刻印石

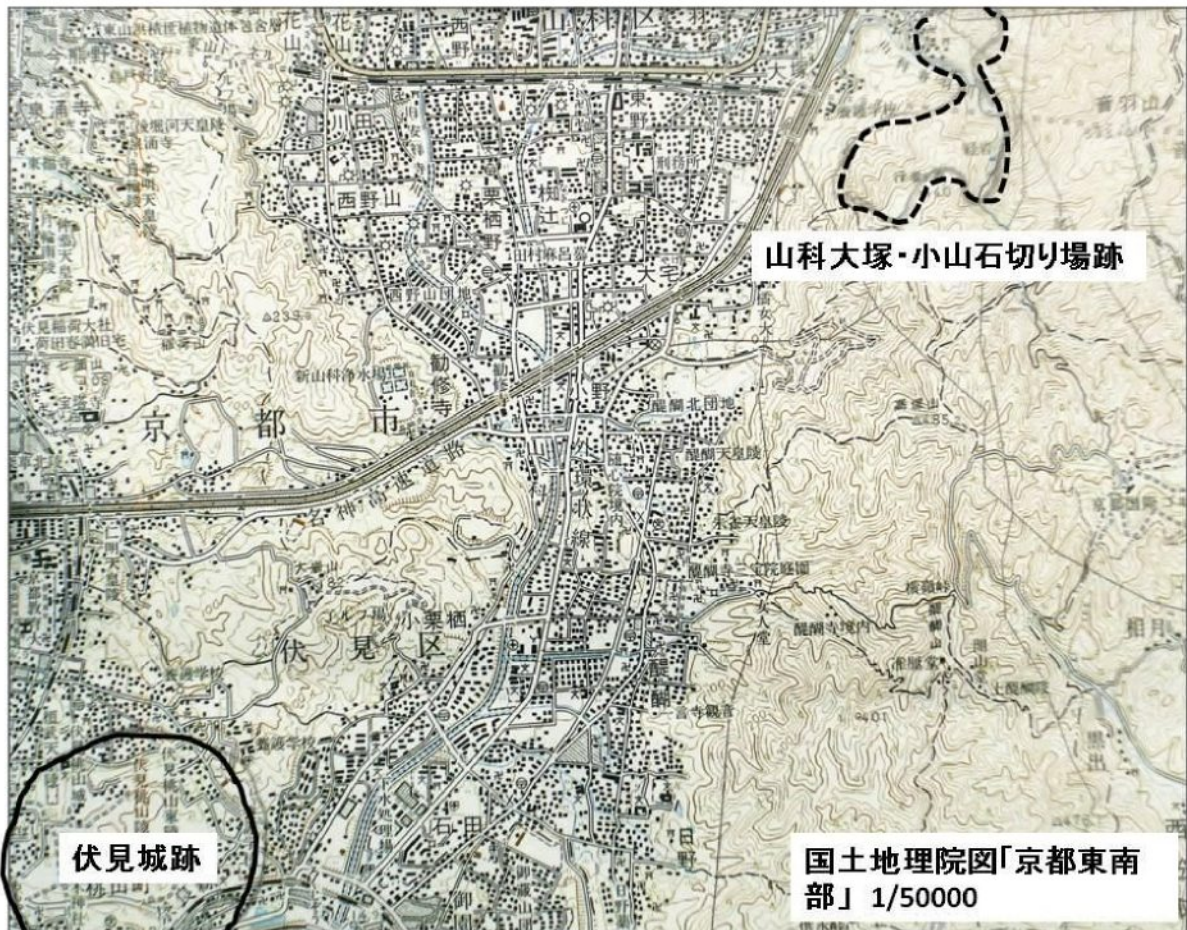


図2 伏見城跡と石切場跡の位置関係

その後の話題としては、『大塚小学校 10 年誌 昭和 59 年』と『老人らが子等に語る山科風土記 平成 2 年』に載る程度であったが、一方では山科区役所前の区誕生 20 年、洛東ライオンズクラブ 25 周年記念歴史マップ（石製）には、「伏見城石垣石採石場」として地図に示されているし、淀川の大坂毛馬の閘門跡堤防公園には、残念石が揚げられて「山科の石」として 4 石が（築城史研究会故藤井重夫）、2001 年の二条城東石垣の崩れの修復（天端石）の際、「山科の石」（築城史研究会永井太一郎）として、特定もされていたようだ。

2 石の刻印「角立ち四つ目結」確認以降の 34 年後になった 2012 年に、中川があらたな「一に〇」なる刻印石 2 石（図 3）を発見し話題となり、所属する「ふるさとの会」で見学会が実施された。一方で久保は、2001 年に関わる山本正明氏より聞き取りを経て、親子で「角立ち四つ目結」を確認している。中川、武内、久保がお互いに知らない 4 石を見て回ったのが 2012 年 11 月 4 日（18 人参加）であった。（というように山科区民には刻印石の存在すら知らされていなかった前史がある）



図 3 「一に〇」刻印石

調査の開始にあたって（それに先だち既に知り得ていた資料としては次の五点になる）

1、小瀬甫庵著『甫庵太閤記』

「文禄三年二月初比より、廿五万人之着到にて醍醐、山科、比叡山、雲母坂より大石を引き出す事夥し…」

2、立川善彦編『訓読 雍州府志』卷六 土石の部 貞享三（1686）年頃

「…また、山科郷小山辺、大石多し。その色、紫黒なり。方広寺大仏殿の楼門左右の石壁、多くはこの処に採れりといふ。…」

3、津久井清影（平塚飄齋）著『聖蹟図誌』文久二（1862）年、但し松田緑山の銅版画

「一 城州宇治郡山科郷御廟野 天智天皇陵内に 陵垣内一圓小山大塚石ヲ以築上…」とある。

4、虫明正磨著『宇治郡明細誌』明治四（1872）年

大塚村の項に、「一、当村山より大仏殿并二条城普請之節石切出し山荒崩音羽川中川辺へ土砂流出ル」との記述

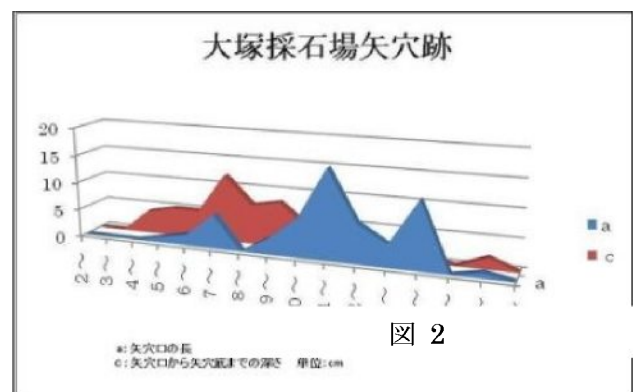
5、小山、白岩神社「御神体岩」の頂上部に矢穴列痕 2 条（8 穴と 10 穴）の存在（頂上部 10 m、高さ 7 m ぐらいの大割れ石）と、『洛東高校本 山科古図（天保頃の作図か？）』には、小山白石大明神（白石神社）の北に「イシキリ場」の表記がある。

調査開始と文化財保護課へ申し入れ

2012年12月26日の見学会では「角立ち四つ目結」刻印2石の案内（A地区〈地区は図8を参照〉、久保）と、「一に〇」刻印2石の案内（B地区、中川）で現場を確認したが、ここでわかったことは、34年前の調査ではおせき溪筋の南側（A地区）のみで、北側には調査が及んでいなかったという事実である。つまり、中川によるあらたな刻印石発見がきっかけとなり、その後の刻印石や採石場の展開へと続いていく。

おりしも京都では聚楽第跡で石垣が発掘され、その現地説明会と保存説明会に訪れて、山科大塚A、B地区の刻印石と小山、白石神社の御神体岩とも併せて、伏見城石垣石の一連の採石場ではなかったのか、認知と遺跡登録に向けて運動を展開する気運が生じた。

その際に、山田邦和氏から刻印石・採石場の現況報告をまとめて文化財保護課に提出する旨、教示を受けた。早速にB地区内24の矢穴跡と矢穴列痕の間口、深さを計測しグラフ化し（図4）、桃山御陵に残る伏見城残石矢穴跡と対比した。その報告（中川・武内・久保「大塚高岩の『一に〇』刻印石と採石場跡」2013年）を持って、京都市文化財保護課へ遺跡登録を要請した。矢穴痕、矢穴列痕などの計測方法、数値のグラフ化については、森岡秀人・藤岡裕著作「矢穴の形式学」（『古代学研究』180号所収）を参考にした。



刻印石の調査

2013年6月12日、大塚山の共同所有者で代表でもある平井信夫氏の了解を得て、現地調査会を実施し、文化財保護課職員を案内した。その際、B地区で、見学会同行者からあらたに「一に〇」の刻印が指摘され（これは中川発見刻印石の違う面での併刻刻印となる）、この時点で刻印石4石、5刻印が確認された。

刻印採拓のために刻印面の掃除をしていたとき、驚いたことに「一に〇」横に漢数字の「二」が現れた（図5）。後日、前出永井氏（築城史研究会、1978年度の大塚刻印石調査メンバー）も加わって調査すると、同じ刻印石にさらに「一に〇二」の刻印が確認された（つまり「一に〇」刻印



図3 「一に〇二」刻印

は1石、「一に○ 二」刻印は2石となる)。

後にC地区とする「行者が森」山の東面に大石が沢山ある事に気づいていた武内が、B地区との石材の有り様の対比から、この方面にもあるのではないかと予想して調査した結果、新たに「一に○」刻印石を発見した。目を改め、武内の案内で中川、久保が調査すると、さらに大ききこそバラつくが3刻印石が現れた。ここで、その後の発見刻印石も含めて表にすると以下になる(刻印石14石と17刻印の出現)。

山科大塚(行者の森)山、大名藩刻印一覧表

調査 久保、武内

地区	No.	刻印	寸法	石材名	岩の寸法 他	特記
A地区	1	角四つ目結	一辺 12	デイサイト?	横 2,4m 高 1m	1978年までの 発見、確認
同上	2	角四つ目結	一辺 12	石英斑岩、	2,8m×3,2m	
B地区	3	一に○	a32/b32	石英斑岩	4,5m×3m 二は 15cm 幅	同岩異面刻印
	4	一に○ 二	a27/b34			
同上	5	一に○ 二	a25/b28	石英斑岩	3m×3,5m	二は 8cm 幅
C地区	6	一に○	a35/b32	石英斑岩	2,4m/1,7m	
同上	7	一に○	a37/b31	石英斑岩	2,2m/1,7m	
同上	8	一に○	a31/b31	石英斑岩	1,7m/4m	
D地区	9	角四つ目結	一辺 12	石英斑岩	0,6m/2m	13/12/04 発見
同上	10	角四つ目結	一辺 12	石英斑岩	0,8m/4m	13/12/25 発見
E地区	11	一に○	a23/b25	石英斑岩		13/12/31 発見
同上	12	平四つ目結	一辺 16	石英斑岩	後 14/03/16 発見	同面併刻刻印
	13	一に○	a18/b19		先 13/12/31 発見	
同上	14	平四つ目結	一辺 15	石英斑岩	先 14/03/16 発見	同面併刻刻印
	15	一に○	a42/b43		後 14/03/17 発見	
同上	16	一に○	a21/b15	石英斑岩	二は 8cm 幅	14/02/21 発見
同上	17	一に○	a42/b43	石英斑岩		14/02/22 発見

表1 刻印石一覧

※a は「一」の長さ、b は「○」の径、単位 cm (2014年3月23日現在)

※刻印石は14岩で、併刻刻印3石(但し面を替えて1石、同面2石)大名藩印は17刻印となる。

※石材について、石英斑岩以外のデイサイト?とするのも、かつては輝緑凝灰岩ともいわれていたが流紋岩よりデイサイトとする方がより近いとの教示を受けた。

※1977年~1979年にかけての2石以外は、すべて2012年以降極めて近年での発見である。

それぞれの刻印石の発見には物語がある。特徴的には、A地区では2石以外に出る可能性は皆無とされていたが、2013年8月18日の18号台風でA地区南側の溪筋の土砂が流され、花崗岩系の石が洗われて白く目立ったので調査をすると、大きな石英斑岩の転石に「角立ち四つ目結」刻印が現れた(図6、武内)。またその後、ひのき溪(便宜的な名称)筋の上部にあたる所で、前出の平井信夫氏が「角立ち四つ目結」を発見し、4石となった。



図4「角立ち四つ目結」刻印

ここまでの調査で、大塚山一帯の採石場刻印が、おせき溪筋を境に、南側に「角立ち四つ目結」、北側に「一に〇」「一に〇二」が分布することがわかった。「角立ち四つ目結」は京極若狭藩、「一に〇」刻印は、安岐毛利藩の採石場跡と推定されている。「一に〇二」は、毛利藩家中組(四組あるとされる)の二組の作業とする表示を示すものであろう(森岡氏の教示)。

2014年3月16日、青地一郎氏(城郭談話会)のよびかめに応じた森岡秀人氏を中心に、各地の研究者が参加した見学会であらたな刻印石が見つかった。江戸城の石切場を調査している三瓶祐司氏が、「平四つ目結」刻印を発見したのである。「平四つ目結」刻印の発見で三種の藩印刻印となり、しかも、その石には既に「一に〇」刻印があり、「平四つ目結」は同面斜め下方からの出現(併刻



図5「一に〇」と「平四つ目結」

刻印、図7)だった。と同時に、右手1.6mばかり離れた所の石にも同じ「平四つ目結」刻印が出た(武内)。翌日には、採拓のためにその面の左斜め上方の苔を落とすと、彫りの浅い「一に〇」刻印が出て、これが左右対称併刻刻印石の出現となった。

新出「四つ目結」の寸法は、15cm~16cmに収まり、京極藩とする「角立ち四つ目結」の一片12cmとの違いは明白になる。見学会のその場で、森岡氏は越前松平藩の藩印と指摘されている。

前掲の表以外に今日までにあらたな刻印石は出ていないが、新たな課題は、併刻刻印石の「一に〇」と「四つ目結」の上下の位置関係をどう理解するかである。2併刻刻印石とも毛利藩刻印が斜め上部にあり、松平藩刻印が斜め下部に刻印されている事実(図7)の理解である。ここでは報告にとどめ、今後の検討課題としたい。

以上が刻印石発見についての経緯と概要である。

矢穴列・矢穴痕・矢穴列痕のある石、木っば石等の分布（図8 地図参照）

AエリアIグループとした所には、この区割りの全てで、大塚採石場の最初になる刻印石（牛岩）が存在しながら調整石すら何れも、34年前の調査時点でも石は全てが持ち出されたのではないかとの話であったらしい。しかし、文禄期に遡る紡錘状矢穴（2穴、森岡氏確認）1石と法量のはなはだ小さい1石の矢穴痕を残している。しかし台風



図6 大塚・小山石切場、刻印石、矢穴他分布図

過で小さい溪筋の土砂が掘り起され、石英斑岩も現れる筋が出てきた。A-IIグループ内にあるひのき溪筋に2ヶの矢穴石があるが、上部にもA型矢穴の木っば石1個がある。近くにはハツリ石を抱え込んだ様な落とし積みのある腰高の石垣と、「角立ち四つ目結」刻印石が2石出ているが、全体には石の残存量が一番少ない区割り個所となる。

BエリアIグループは登山道を挟み南北するが、典型的な矢穴列を見せる大ワレ石（図9）が残り、小さい区分けではあるが石数量は多い。矢穴間口、深さ等を計測しグラフパターン化したのが、このエリア内矢穴



や痕列の残る石 24 個である (図 4)。その後の調査で数も増えたが、おせき溪筋 (南) へ落とすのであろうか、溪手前の段差に残る矢穴石があるのと、登山道を境にしては音羽川 (北) への引き出しとするのを B-II、B-III グループの小区割りとして設定した。この B エリアには、石取出しと関わるのか円形の石囲い状 (一段) が何ヶ所かある。これは明らかに土留めの為の石組とは様相を異にしている。

C エリア II グループの上部には、大塚の人達の境界石と称される矢穴が打ち込まれた石があるが、矢穴が目印になりやすい特徴からだろうか。その石を頂点にして扇状に広がり北に向かう溪筋の二本には、音羽川への引き出しが想定できる花崗岩系の石が残っている。その一つの筋には、チャート状の石にはさまれ、溪をふせぐ形で残る花崗岩系の石 (「塞ぎ石」と呼んでいる) がある。そこから急なノリ面を経て音羽川へ落ちていて、下の登山道 (牛尾山) と面一の箇所には紡錘状 (文禄期) の 5 穴列痕の I 石 (図 10) が存在する。

図 7 B-I エリア矢穴列石



C エリア II と I を分ける尾根筋に石組が残り、石組は腰高だが矢穴列痕が残る石 (3 石) が組みこまれている (平井氏によると、祖父の時代の土留めの為の石組工事との証言)。

図 8 紡錘状の矢穴列石

C エリア II グループ一帯には石材の残りは多い。これらは石垣として不適當と判断され残っているのか、矢穴痕石も見られる。丁場と仮定する刻印石の所在 (C I) する辺からも石材は運ばれていると思うが、ここからも溪筋を経て音羽川への経路一筋は想定できる。

C エリア III は大塚では最上部となる石切場でほとんど II との違いはないが、刻印石の出現によって区割りをしただけである。直接東の音羽川より一旦北の II に運ばれて音羽川へとの道筋を考える (以上が大塚「行者が森」山)。

音羽川筋エリアには、B, C エリアからの運び出し石材の残りが散在している。矢穴も、古 A、A, C, D タイプが見られ、江戸初期から現在まで切り出されている。

音羽川と牛尾山参詣 (登山) 道の北にある D エリア (小山地区) には、白石神社があって御神体岩に 2 列の 8 穴と 10 穴列の矢穴痕のある石 (図 11) が存在している。宮司のいない神社ではあるが村持の宮で、御神体も牛尾山 (初穂山) からの神の依り代と考えられている。小山地区の一部の人は、その矢穴の存在を知っていたが、そ



図 9 御神体岩の上部

れが石垣石としての伐り出しと結びつけられていなかったようである。神社の裏山（北）約 200m 上部にある石切場は、資料 5 としてあげたように知られていた。本願寺領としての傍示杭が残る山の石切場で、町名の「小山御坊ノ内町」とも関連する。

このエリアでは、18 個の矢穴痕や列痕を数えるがほとんどが木っば石で、石英斑岩を含む石材が四種に及び、再利用として小さい溪筋の荒積みの石垣になっている。先に挙げた御神体岩の矢穴や石垣に残る矢穴の判定では A 形式の最初期になる（森岡氏）。

森岡氏に、このエリアを調査していただいたのは、京都市の今回の遺蹟登録にあたり、大塚以外ではもっとも小さい区割りで一ヶ所となる D エリア（小山）が除外される危惧があったからである。氏の調査で、この小山エリアも、伏見城石垣石を切り出した一連の採石場であることが明らかになった。

最後に

山科石切場跡を遺蹟登録してもらうために、私たちは、まず大塚山と小山の調査を始めた。その中で、多くの市民に知ってもらうために、発見された刻印石や採石場跡の案内に取りくんだ。また、関心のある人が見学しやすいように、刻印を巡るコースも設定した。幸い、発見のつど新聞記事にもしていただき、多くの人の知るところとなった。

地元、山科区民には区主催の「魅力探訪」で刻印石を紹介したり、図書館に「大塚刻印石・採石場跡」展示したりした。区役所前の案内には表示されるようになり、里山的な大塚「行者ガ森」山の刻印石と伏見城との関わりを、実感を味わってもらえたと思う。

これまでの調査を通して、山科大塚・小山採石場跡には、古 A、A,B,C,D タイプなどあらゆる種類の矢穴が確認され、史料 1～5 までの記述が裏付けられた。

刻印石の調査がほぼ終わった段階で、まだ残されていた矢穴や矢穴痕などの調査にかかり、現在 138 まで計測し終えた（武内・久保）。今日現在まで、学術調査とまでは至っていないが、これらのデータが今後の研究の基礎データとして活用されることを願う。

また、京都市文化財保護課により、早急に大塚と小山一帯を調査していただき、遺蹟地図に反映していただくよう願っている。

「角立て四つ目結」、「平四つ目結」刻印使用の藩の特定や、「一に〇」と「平四つ目結」の併刻印石の解明など、調査が進むにつれて出てきた課題については、今後の研究にまちたい。

なお、武内・久保は、車石・車道研究会（2003 年創立）に所属しており、大津市歴史博物館と共催した「企画展 車石—江戸時代の海道整備—」（2013 年 3 月～4 月）の場で、青地一郎氏に出会い、車石の矢穴や矢穴の研究論文について教えていただいた。

さらに、今回の現地調査にも加わっていただき、刻印や矢穴について多くのご教示をいただきました。

最後に、この報告を作成するにあたっては、山の所有者の協力や、見学に参加された多くの方、とりわけ森岡秀人氏には、多くのご教示をいただきました。

ここに記し、お礼としたい。